

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370870

研究課題名(和文) 職業技術教育の社会的機能とジェンダー 帝政末期ロシアの教育と社会

研究課題名(英文) Functions of Post-primary School and Gender in Changing Society: Vocational School in Late Imperial Russia.

研究代表者

畠山 禎 (HATAKEYAMA, Tadashi)

北里大学・一般教育部・教授

研究者番号：60400438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、帝政末期ロシアにおける初等後教育機関の社会的機能とそのジェンダー格差を、近代化にともなう民衆の職業教育機会の拡大、生徒の社会構成、学校教育をつつじた社会移動と身分・階層構造の再編という切り口から考察した。初等後教育機関は下層出身の男子や女子に知識や技能を伝達し、ロシアの急速な工業化に貢献する人材を養成した。さらに、民衆の社会的上昇機会を拡大させ、社会構成の再編成を促進した。このような学校の機能はロシア人の男子が通う学校で強く、初等後教育の拡張は教育におけるエスニシティやジェンダーの不平等を拡大した。

研究成果の概要(英文)： This research project aims at exploring the functions of post-primary schools, such as vocational schools, and their gender inequality in late imperial Russia, taking into account the state educational policy, the activities of educational organizations, students' social background, their withdrawals from schools and their future courses after graduation.

Vocational schools functioned as places for transmitting knowledge and skills, teaching boys skills like metalworking and woodworking and girls sewing skills. Thereby, they supplied skilled workers, artisans and lower technical experts to Russia's rapidly developing industries. They also offered lower-class boys and girls opportunities for upward mobility, which resulted in the accelerated change in socio-economical stratification. This study also shows that the expansion of post-primary education exacerbated ethnic and gender inequalities in education.

研究分野：ロシア近代社会史

キーワード：ロシア帝国 初等後教育 職業教育 女子教育 身分 社会階層 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) ロシアの近代(19世紀後半~20世紀初頭)は、クリミア戦争の敗北を機に専制国家が農奴解放をはじめとする「大改革」に着手したことで幕を開ける。その結果、工業化が始動し、経済が急成長する。社会ではさまざまなアソシエーションが出現し、慈善事業や教育事業などで積極的な活動を展開する。他方、政治においては反体制運動が激化し、帝国の各地ではナショナリズムが高揚する。そのような状況下、ロシアは第一次世界大戦に参戦し、ロシア革命が勃発して帝政は崩壊する。以上のような旧体制の解体プロセスと密接に結びついていた社会構造の変動と関連して、近代化にともなう新しい社会層の形成過程や、その編制に与った学校教育の機能や役割を解明することが求められている。

(2) 一般に、産業発展や資本主義化は従来の身分制的な支配・従属関係を後退させ、階層・階級にもとづいた社会関係の生成を前進させる。たとえば、官公吏、専門職、企業家、労働者といった新しい社会層が登場する。この過程において、教育システムは人材の選抜・社会化・配分機能を果たすことで、次の時期の階層構造の編制に影響を与える。従来の教育社会史研究はエリート層を念頭にこの教育と身分・階層の再編プロセスとの関係性を把握しようとしてきた。その一方で、より広範な人びとを取り込んで社会構造の変動を促進していたと考えられる民衆教育システム、とくに初等後教育に関する研究は少ない。たしかに、初等教育は大都市を中心に急速に普及していったが、修業年限まで在学して卒業する者は限られ、職業教育機関などの初等後教育機関に進学する者はさらに少なかった。とはいえ、進学者数は着実に増加しており、初等後教育機関がどのような社会的機能を果たしていたのかが注目される。

(3) 研究代表者はこれまでに、初等後の男子職業教育について、ロシア政府の教育政策、政府、地方自治体、技術教育団体や慈善団体、教育活動家、企業家などによる教育事業、生徒の社会構成を考察してきた。そして、政府は産業振興だけでなく身分制秩序の維持という思惑から職業教育政策を展開したが、結果的には学校教育を拡張させ、学校が民衆の中から産業界の求める人材を選抜する機能を果たすようになったことを明らかにした。広大な国土と住民の多様な構成が特徴的なロシア帝国の場合、生徒の社会構成の「民主化」プロセスにおいても、身分階層・ジェンダー・エスニシティにもとづく格差が大きかった。

2. 研究の目的

(1) 男女職業教育を対象に、国家・社会・個人がどのような関心や目的から教育事業に参画していったのか、学校はどのような社

会層に教育機会を提供したのか、生徒は卒業後どのような進路を選択したのかについて考察する。その上で、帝政末期のロシアで学校が果たしていた社会的機能を評価し、学校教育が社会構造の再編に与えた影響について、ジェンダーにもとづく差異にも留意しながら判断する。

(2) 男子職業教育について、教育政策や教育事業の展開プロセスにかんするこれまでの研究につづいて、退学状況、退学と生徒の社会構成との関連性を究明する。その上で、卒業生の就職先、職歴、空間的・社会的移動を追跡することで、学校の人材の選抜・社会化・配分機能を見極める。

(3) 女子職業教育については、まずロシア政府の教育政策を概観する。つづいて、教育活動の担い手たちが女子教育に対して持った関心や学校開設の目的を探り、教育事業の展開プロセスを確認する。その際、担い手たちのジェンダー観にも立ち入る。生徒の社会構成と卒業後の進路を具体的に把握する。

3. 研究の方法

(1) ロシア連邦・サンクトペテルブルクのロシア国民図書館、ロシア国立歴史文書館、サンクトペテルブルク市国立中央歴史文書館、フィンランド共和国・ヘルシンキのフィンランド国立図書館(兼ヘルシンキ大学付属図書館)などで、ロシア帝国の立法・行政文書、政府や諸団体の教育事業に関する文書、個別学校の沿革・記念集、年次活動報告書、生徒名簿、成績簿、退学者一覧、卒業生の進路に関するアンケート調査個票などの史料や二次研究を調査・収集する。

(2) まず、男子職業教育機関における生徒の退学実態、卒業生の進路と社会階層との結びつきについて分析する。考察結果をふまえ、政府の女子職業教育政策、諸団体の事業構想、教育の拡張プロセス、生徒の社会構成と卒業生の進路を調査していく。

(3) 研究のまとめとして、学校の社会的機能、身分・階層構造の再編への作用という観点から、男子・女子職業教育を比較する。両者の共通点と差異を析出し、その要因を考える。以上の検討作業によって、帝政末期ロシアの教育と社会構造の関係を立体的に解明することをめざす。

4. 研究成果

(1) 男子職業教育の拡張は初等教育修了者に新たな進学先を提供した。しかし、職業教育の現場では退学者が多数発生していた。その原因は生徒の成績不良や準備不足だけでなく、就労に最低限必要な知識や技能を習得することのみを就学の目的とし、卒業を待たずに退学するという生徒側独自の教育戦略

にもあった。卒業者と退学者との間の出身階層の偏りは縮小傾向にあり、下層出身者の教育機会が拡大するにともない社会的出自が卒業・退学の主要な規定要因とはならない状況が作り出されつつあった。

(2) 男子職業教育機関の卒業者はおもに自ら履修した教育内容にもとづいて工業関連の職業に就いていた。卒業者の多くは専門領域内で転職を繰り返し、個人差はあるものの職位や収入の上昇を実現していった。成長著しい鉄道業が卒業者の就職先の一つになった。他方で、教育事業の担い手たちの思惑とは別に、官公吏や私企業の事務員、教員など、専門とは関連性の小さい、相対的にステータスの高い職業に転職する者や進学者、失業者も一定数存在した。総じて学校は工業従事者を再生産する役割を果たしていたが、卒業者にステータスの高い就職や進学へのチャンスも与え、そのチャンスは卒業者の出身身分・階層が上位であるほど大きかった。退学者も学校で得た最低限の知識や技能をもとに相応の職を得ることができた。

(3) 男子職業教育機関は地元のみならず国内各地の工場生産や手工業、鉄道、電信その他に中下級技術者や熟練工を供給することで、19世紀末ロシアの急速な工業発展や重工業化に貢献した。他方で学ぶ側である民衆にとって、男子職業教育機関は工業、輸送・通信業関連の職業に就く機会を与えただけでなく、行政、商業、教育といった新中間層に分類される職業に移るための足がかりにもなっていた。このように、男子職業学校教育はロシアの工業化を直接的・間接的に担う人材を養成するとともに、下層出身者の中間層への社会的上昇機会を拡大させ、従来の身分制によって秩序づけられていた社会から階層によって秩序づけられた社会への移行を促進していた。

(4) つぎに、女子職業教育について、ヨーロッパ諸国の女子職業教育活動に影響を受けた民間の団体や教育活動家が中心となり、ロシア社会の特性を考慮しつつ独自のジェンダー観を構築し、教育事業を推進していった過程を明らかにした。ロシアを代表する科学技術団体であるロシア技術協会は家庭における妻・母役割と結びつけながら女子職業教育の目的や教科を精査し、女子職業(手工業)学校・課程一般規程案を作成したほか、手芸教員の養成、ロシア技術・職業活動家大会の開催などをつうじて女子職業教育システムの基盤を整備していった。

(5) 一方、女子職業教育に対する政府の関心は1890年代前半まで総じて低く、教育システムの身分的・階層的秩序を維持するという目的の一環で女子職業教育に注目したにすぎなかった。その後、商工業の急成長や女

子職業教育需要の拡大を背景に、政府は女子職業教育事業に積極的に参画するようになる。

(6) 女子職業教育機関の卒業者は、おもに工場の裁縫職人として就労したが、よりステータスの高いものと考えられる手芸教員や自宅での裁縫仕事請負が増加していった。その他、商店員、事務員などになる者もいた。学校教育は、ゆるやかではあるが、相対的にステータスの高い、自立の道を開く職業に就く可能性を拡げていった。自宅での裁縫仕事請負の増加は、工房ではなく在宅での裁縫仕事と家事・育児とを両立させて補助的な収入を得るという「主婦」志向が、下層にも浸透してきたことをうかがわせる。

(7) 男子職業教育は金工・木工などの熟練工養成を目的とし、その内容もロシアの産業発展や科学技術の発展と直接的に関係していた。急激な経済成長のもとで、下層出身者は学歴・資格(熟練)・卒業生の紐帯を足がかりに生存手段だけでなく中間層への社会的上昇機会を獲得していった。他方、女子職業教育の目的は女性の家庭での妻・母親役割と結びつけられ、裁縫や家政など家事労働技能の習得や小規模工房の職人養成に置かれた。内容的にも産業発展や科学技術の発展をあまり反映していない。男子と比較すると、女子の進路は教育事業の担い手の想定範囲内に収まり、産業発展への人材面での貢献という点でもあまり目立たない。卒業後の社会的上昇機会は総じて小さかった。

(8) 職業教育機関の設置は首都サンクトペテルブルクやモスクワなどヨーロッパ・ロシアの大都市を中心としていた。これと関連して、生徒のエスニシティ的出身もロシア人に集中し、非ロシア人はユダヤ人などを除いて教育の拡張の恩恵を受けることができなかった。ロシアの工業化を直接的・間接的に担う人材を養成し、下層出身の卒業者の中間層への社会的上昇機会を拡大させるという役割は、非ロシア人の通う学校よりもロシア人の通う学校が、女子校よりも男子校が強かったと考えるべきである。初等後教育の拡張は、教育におけるエスニシティやジェンダーの不平等をむしろ拡大したと言える。

(9) ただし、ジェンダー観を構築し、それをもとに学校の配置、対象生徒、教育目的や科目内容などを構想していったプロセスにおいて、政府や民間教育活動家がどの程度エスニシティやジェンダーにもとづく教育格差を意識していたのか、より具体的に論じることができなかった。エスニック・マイノリティや女性の側から不平等を克服するための動きがあったのか、第一次世界大戦時に不平等の見直しが図られたのかなど、不明点も多い。女子職業教育機関卒業者の進路と結

婚・家族との関係についても、学歴が結婚の際に高く評価されたのか、経済力のある相手との有利な結婚のチャンスを大きくしたのかなど、いくつかの論点が残されている。引き続き、史料の調査と分析を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

畠山禎「女子職業教育の拡張とロシア帝国の女子職業教育政策」『北里大学一般教育紀要』査読あり、第 23 号、21～48 頁、2018 年。
DOI: https://doi.org/10.20700/kitasatoclas.23.0_21

畠山禎「帝政末期ロシアにおける女子職業教育の拡張と社会——ロシア技術協会の女子職業教育事業を中心に」『北里大学一般教育紀要』査読あり、第 22 号、17～42 頁、2017 年。
DOI: https://doi.org/10.20700/kitasatoclas.22.0_17

畠山禎「近代ロシアにおける職業技術教育機関卒業生の進路——産業発展、社会階層の再編と工業学校」『北里大学一般教育紀要』査読あり、第 20 号、45～80 頁、2015 年。
DOI: https://doi.org/10.20700/kitasatoclas.20.0_45

畠山禎「帝政末期ロシアの職業技術教育機関における退学と生徒の社会構成」『北里大学一般教育紀要』査読あり、第 19 号、1～29 頁、2014 年。
DOI: https://doi.org/10.20700/kitasatoclas.19.0_1

[学会発表](計 1 件)

畠山禎「帝政末期ロシアにおける職業教育機関卒業生の進路とジェンダー」比較教育社会史研究会秋季例会、青山学院大学(東京都渋谷区)、2017 年 11 月 19 日。

[その他]

畠山禎(書評)「山縣弘志著『ロシア製鉄業史論』(学文社、2017 年 1 月、622 頁)」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』依頼あり、第 1017 号、48～53 頁、2017 年。

畠山禎(シンポジウム・コメンテーター)「シンポジウム 中国・ヨーロッパ・日本 近代世界の形成とネーション」中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所共催、中部大学(愛知県春日井市)、2018 年 2 月 9 日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畠山 禎 (HATAKEYAMA, Tadashi)

北里大学・一般教育部・教授

研究者番号：60400438